H9.8.16(土)
↦ H6.6.6(月)

5,793P−1/2

偈 小林 94P

担う元1699P 荷え528P

嚢 小林 227P 囲 5776P 2044P

布袋 広2044P 百科㉘−378P 後梁え962P

太いゴチ

布袋（布袋和尚）

布袋和尚（〜九一六）

中国後梁の僧、名は契此、中国明州奉化県の人である。

四明山に住み、体躯は肥大で大きな腹を露出させ、常に杖を持ち布嚢を担って喜捨を求め歩いた。世に超然として過すところがあり、時の人は「長汀子」、または「布袋師」と呼んだ。吉凶を予見してまちがうことがなかったと伝えられ、偈（仏力をほめたたえる韻文体の経文）をよくし、後梁貞明二年（九一六）三月、奉化県の岳林寺において没したという。

布袋和尚は、いつの頃からか弥勒の化身として尊ばれるようになり、また七福神の一人として数えられるようになった、という。

（「世界大百科事典」平凡社〈布袋〉。「広辞苑」〈布袋〉参照）

●なお、「ほて」は、腹の異称とされる。（「広辞苑」〈ほて〉参照）

（第13巻）422

広 四明山 ↔ 浙江省寧波の南西 中国 いう

〜九一七とも

368

コクヨ ケ−20 20×20

それでは、
ホテイ和尚は、日本の神話中、最も著名な貴人中の誰と結びつけらるべきだと考えれば妥当であろうか。
というまでもなく、常軌を逸した奇妙なことをしている
のようにも思われるが、全く定かならないことでもあるが、――「ホテイ」といえば、

(を)ほと乎富等大公王（継体天皇）のことであろう、と直越される。

すでに述べたように、

(を)ほと乎富等大公王（継体天皇）
①乎富等大公王（継体天皇＝男大迹天皇）
②神武天皇（彦火火出見尊）
③太田田根子

の三者は、同一人物なのであろうと思われる。

そして又、先述のように、

(1)曾祖父は、ホホ、ホト王（意富々迹王）

――――大きな陰部を持っている男、

コクヨ ケ-20 20×20

(2)継体天皇は、ヲホト王(乎富等大公王)(ほと)(おほと)(そうそふ)男大迹天皇)ーーーー曾祖父よりは小さな陰部(ほと)を持っている男、という名をお持ちだったのであろう、と拝察される。(第六十五章ヘ曾祖父(そうそふ)は大きいホト、男大迹は小さいホトヘの項において既述)

この物語では仮りに、

(1)「ホテイレ(布袋)」、

(2)「ホトレ(神武天皇=継体天皇(じんむ)(けいたい))」、

の両者を習合させて考えてみることにしたい。

「ホテイレ」と、「ホトレ」とは、ほぼ似たような音であるといえよう。

もっとも、ヘ継体天皇は、偉大な天皇であったヘというただそれだけの理由で、ーーーー継体天皇を七福神の一人とみなしたとは考えにくい。

どうしたわけで、継体天皇を七福神のうち、ヘ入れることになったのだろうか。

恐らく、

ヘ神武天皇(後期継体天皇)は、晩年に天皇

#6.6.8 9月(土)

5,795P

ホト上皇 (五)3309P (壬)3308P

みろく 継体上皇の仏像 みろくか？

あまね 布く 紀上240P (紫神ケ手)

紀上213P

(壬)3305P

紀上240P

紀上2193P

伍を譲り、大田根子と名乗って三輪山の大物主大神をまつる祭主となり、そしてやがて大神神社の近傍に仏像を安置して、布く天下に仏教を広める基いを築かれた。そこで斯一て、始取天下天皇と号した〉のであろう。

すなわち継体上皇（＝ホト上皇）は、日本に始めてホトケの教え（仏教）を招来されたので、特に敬って、始取天下天皇と諡されたのであろう、と思われる。〈第六十五章八日辺日本国（近畿）への仏教伝来〉の項において既述〉

そんなにも偉大な、一一一我国の仏教史上決一て忘れることの出来ない継体上皇（＝ホト上皇）を、どの仏神と習合させるべきであろうか。

だが、仏神の誰かと、継体上皇とを習合させるとは、一一一一一出来ないことはなどうしても、無理が感じられた。

そんなとき、誰かが、

「仏教に帰依されたホト上皇を、中国の僧侶と布袋和尚と習合させることが出来れば良いのだが」

と、つぶやいたことだろうか。

のではなか

コクヨ ケ-20 20×20

次行「ほて」
⑧5793'

5796'

●とはいえ、
人残念ながら、布袋和尚は「仏」でも「神」でもない。
神でも、布袋和尚を、「七福神」の一人として加えることなど、出来るものではない。
●誰もが、そう思った。
●そしてあきらめかけたその時、こう言った者が居た。
「それは良い考えだ。布袋和尚を七福神の一人にしよう。そもそも「神武天皇」という名には、「神」という字が含まれている。神武天皇、つまり布袋和尚が七福神の一人であっても、少しもおかしくはない」
●そんなわけで、神武天皇（川ホト上皇）は、布袋和尚と習合され、「七福神」のうちの一人として収まることになったのかも知れない。

「そして布袋和尚の「ホテ」（腹部）は、その後暫が経つにつれ、いよいよ強調されてゆき、ーーーーーやがて、はちきれんばかりの大

H30(2018)11.30(金)～11.30
H31(2019)4.30(火)～
H9.8.16(土)
H1.10.22(日)

5,797P

厂史読本「77の謎」184P
聖徳太子の世紀

百科28-378あと
中口と日本の布袋の絵有り

きなおなかをもった布袋の絵が描かれるようになったのであろう、と想像される。

この因みに述べると、継体天皇の出身地とされる越前国の福井市街を北に見おろす足羽山の山頂に、――一見風変りな石像「継体天皇像」が立っている。

●大きな顔を持ったこの像は、左肩の上方から右足つま先にかけておろした杖を両手で軽く握っている。

●明治十六年に建てられた石像は、昭和二十三年の福井大地震で崩壊、現在見られるのは昭和二十七年に再建されたものである。(「歴史読本」聖徳太子の世紀77の謎、新人物往来社、昭和五十二年五月号、一八四頁参照)

●常に杖を持って描かれる布袋の絵と、杖を持ったこの継体天皇像とを見較べてみるとき、――両者が何となく似ているように思えるのは気のせいであろうか。

●もっとも福井の継体天皇像の腹部はせり出しておらず、露出されてもいない。

コクヨ ケー20 20×20

福禄寿

福禄寿は、福と、禄（さいわい・ようこび）と、寿命とをもたらすとされる神である。身体のわりに長い頭（頭でっかち）で、髯（ほほひげ）を伸ばし、経巻（経文を記した巻物）を結びつけた杖を携え、多く鶴を従えた姿であらわされる。中国では、福禄寿は南極星の化身とされる。

なお、南極星（老人星・南極老人星・寿星とも呼ばれる）は、シリウスについで明るい天空の南極に近い恒星で、人の寿命をつかさどるといわれ、また、この星が現われると天下がよく治まると伝えられた。三月上旬、午後九時頃、地平近くに南中する竜骨座の首星である。（「広辞苑」）

福禄寿・南極星・老人星（参照）

そして又、鶴は、太子の乗り物とされている。

「周の霊王の太子晋（王喬）が仙術を得て鶴に乗って飛行した」

5,799P　井土(下)124P　(由)3993P　紀下173P～4P　さくよう40P,53P　長澤カンク760P

という「列仙伝」の故事にもとづいて、太子の乗物のことを「鶴駕」と称する。また、皇太子の御殿のことを「鶴宮」と呼ぶ。（「明解漢和辞典」長澤規矩也、三省堂）「洛陽伽藍記・水経注」平凡社、五四三頁参照）

とすれば、鶴を従えた福禄寿は、「太子」（聖徳太子）を示しているといえようか。

■聖徳太子は、生まれながらにして弁舌さわやかで、聖人のような知恵を持ち、成人してからは、いちどに十人の訴えを聞いてまちがいなくそれを判別し、これからおこることを前もってお知りになるご察知された、という。（「推古紀元年四月条参照」）

■そして、「聖徳太子二王子像」（太子の左右に山背大兄王と殖栗王の二人を配した御物）に描かれている聖徳太子の肖像には、――髯（ほほひげ）が多い。

●なお、もと法隆寺の宝蔵に安置されていたこの画像の製作年代について、明治以来、専門の学者のあいだで論議が重ねられているが、画像の主人公が、聖徳太子その人であるか、

122

コクヨ　ケ-20　20×20

藤原上 94ページ「ところで」ページ
亀井 174ページ 国 5771ページ 国 5820

5,800

百科(13)-367ページ 四天王寺にて
日本社会 490ページ
藤原(上) 87ページ

井上(下) 125ページ
和(下) 174ページ

ことについては異論がない、という。（「聖徳太子」田村圓澄、中公新書、一七一頁参照）

また聖徳太子は、仏の教えを高麗の僧慧慈に習い、儒教の経典を博士の覚哿に学び、ことごとくそれをおきわめになった、という。（推古紀元年四月条）

さらに聖徳太子は、四天王寺に施薬院・療病院・悲田院の三院を興して貧窮孤独を救済するなど、人々に福と禄と寿命とをもたらされたのだった。（「日本社寺大観」名著刊行会、「四天王寺」。「聖徳太子伝」(上)藤原猶雪、臨川書店、「聖徳太子伝暦」「推古元年条参照）

ところで、「聖徳太子伝暦」推古十三年条には、こう記されている。

「旦には黒駒に騎りて入りて政事を奏し、意れば即ち宮に還り給ふ。日々に間無し。時の人之を異とす」

つまり、聖徳太子は黒駒にお乗りになった

→H1.10.25(水)㊐ 異長澤カンワ576'

㊐5745'

5,801'

㊏5746'

㊐5798' 8行
福禄寿は南極星の化身

というのである。（第438図参照）

● しかし、太子の乗物は鶴駕であるべき筈なのに、――聖徳太子は、一体なぜ白い鶴に乗らず、黒い馬を選んでお乗りになったのだろうか。

● 時の人が異とした（あやーんだ、疑った）というのもうなづけるように思われる。

■ また、厳島神社の社伝によると、推古元年（五九三）、西の方からやってきた三女神が、佐伯鞍職に、

「難波の都の北東の方角に、ふしぎな光をもった星が現われるでしょう。云々」

と言われたという。（第九十六章〈厳島神社〉の項において既述）

● 恐らく、「ふしぎな光をもった星」とは、聖徳太子のことを指しているのであろう。

● なお、先述のように、

「福禄寿は南極星へミリウスについで明るい星）の化身とされる」

という。

㊍

白に限らない。ナベヴルは灰黒色 若い人は白

コクヨ ケ-20 20×20

寿老人 広1073ページ
南極老人 1679ページ
老人星 2353ページ
七福神の絵 百科⑬－291ページ
小林カンク 未102ページ
㊟5793ページ2行 直系

太いゴチ

寿老人（じゅろうじん）

寿老人もまた、布袋和尚と同様（ようす）、「神」でもなく、実在の人物（じんぶつ）である。「仏」でも

寿老人は、中国、宋の元祐年中（一〇八六～一〇九三）の人で、頭の長い（長頭の）老人（ろうじん）で、杖を携え、杖の頭に巻物をつけ、団扇を持ち、鹿を連れていた、という。

また、寿老人は、長寿を授けるとされ、福禄寿と同一（どういつ）とされ、南極老人に比して考えられている。（「広辞苑」〈寿老人〉〈南極老人〉〈参照〉）

㊟5798ページ9行

といえば、迷わずともなく直ちに、〈寿老人は、藤原氏の祖先である天児屋命（中臣烏賊津連、難升米、春日明神）と習合されたのである〉

と想到される。

藤原氏の氏神として尊崇されている春日神社の境内に見られる数多くの神鹿は、武甕槌命が鹿島から春日へ遷座のおりに乗ってきた

㊟5796ページ2行

669 56本 ぎょうつうえん574P
614 1 晩通 よく知り抜いていること 人名索引577P
55 55 ページ

こらい 名833P
古来 昔から今まで
伊勢神宮1190P

5,802P－3/2

1んじ 名1150P
神事 まつり

キリスト教ではない礼拝

白抜き⑤－529～530P

なくーか

白鹿の繁殖したものと伝えられ、古来、春日明神の「使わしめ」として尊敬されている。

●ことに、平安後期からは「神鹿崇拝」が行われ、春日曼荼羅（鹿曼荼羅）図などに描かれて礼拝された。

●鹿曼荼羅は、春日信仰を象徴する神鹿を構図の中心とするもので、鹿の背中に榊を立てたものや、鹿の背上の榊に神鏡を結びつけたもの（例えば東京国立博物館蔵）などがある。

（「世界大百科事典」平凡社、〈春日神社〉

〈春日曼荼羅〉参照）

■昔から「春日常々神事祭祀に従事してきた中臣氏は、「延喜式」「第八に伝えられているような祝詞を申し述べることを任務としていた。（「伊勢神宮」桜井勝之進、学生社、一七〇頁参照）

■また、天児屋命の子孫である鎌足は、中臣氏の長老として、故実第一の暁通者と目されていたという。（「銅鐸」藤森栄一、学生社、一二頁参照）

■そこで、

（二一四～二六九）

コクヨ ケ-20 20×20

433

H9.8.17(日)
H6.6.10(金)

㊎5793-½ きげん 起源 元523 「さて」 ㊎5802-½ ㊎5803 ㊎5807 5830 かぶ人 元447 百科③-228 しゃけ 社家 元1029 を衆(しゅう)生(じょう)の指(ゆび)を下に添えて複数の人を表す

手にする

（長い頭を持ち、杖の上部に巻物をつけて携えた寿老人と、藤原氏の祖先である天児屋命とが、結びつけて考えられたのであろう）

と思われる。

（古雅な楕円形の団扇）

なお、江戸時代には、奈良の春日神社の社家（世襲神職の家筋、社家衆）の内職として奈良団扇が作られたという。（「世界大百科事典」平凡社「団扇」「広辞苑」「奈良団扇」参照）

もっとも、春日神社の団扇が、平安朝当時すでに作られていたのかどうかは、つまびらかでない。

寡聞にして知らない。

米

七福神の起源について

さて、

布袋和尚（九一六）が後梁の禅僧であり、

寿老人が宋の元祐年中（一〇八六～一〇九三）の人であること、

から推察すれば、

日本で七福神の信仰がかなり明確な形で定着したのは、十一世紀後半（つまり平安

とあめ
取り合わせる 元1625
5.804 P
新収 Spec 5804
函科⑬-291
平安末
1192年

時代後期）以降のことであったろう〉
と思われる。

■まったも、
(1)単独で信仰されていた神々が、いつから
複数にとりあわされ「七福神」という組み合
わせが成立したのかは、分っていない。
(2)しかし
ともあれ、七つの神をまとめた「七福神信
仰」は、十五世紀ごろから流行しはじめた
といわれている。（「朝日新聞」平成四年十月
六日付〈お経に毘沙門天と大黒天〉参照）
■ところが、「七福神信仰」の源流に近いと
思われる資料〈版画〉が見い出された。
「七福神のうち毘沙門天と、大黒天（二つ
の俵の上に乗った大黒天）を一枚の紙に並べ
て刷ったお経が、奈良・薬師寺の木造毘沙門
天立像（南北朝時代）の胎内から見つかった。
複数の福の神を取り合せた画像としては最
も古く、奈良国立博物館の河原由雄美術室長
は「近世に流行する七福神信仰の源流を示す
資料」と注目している。
見つかったお経は「金光明最勝王経」巻二

コクヨ ケー20 20×20

（幅十一・十四㌢、長さ十余㍉）で、高さ三十六㌢の毘沙門天立像の胸部にある深さ約十五㌢の空洞に詰め込まれていた。画像が刷られていたのはそのうちの一巻。版画は墨一色。版木は精巧だが、印刷むらが多い。納入経の裏全面の上段に毘沙門天、下段に大黒天を、スタンプを押したように多数並べている。

十四世紀半ばの表の経文末尾の墨書によると、正平十二年（一三五七）に重実という僧が、貧苦などの苦悩からのがれるように祈って書いたもののようである。

河原室長は、「近世の大黒天の多くは俵の上に立っており、俵大黒の絵としても日本最古と言う」（「朝日新聞」平成四年十月六日付）お経に毘沙門天と大黒天〈参照〉

●この版画が、もしも七福神のうちの二神を意識して刷られたものであるならば、〈七福神という組み合せが成立したのは、正平十二年（一三五七）以前のくとであった〉

コクヨ ケ-20 20×20

ということになろう。

■そこで、とりあえず〈七福神信仰は、寿老人〈一〇八六て一〇九三ころの人〉以後、正平十二年〈一三五七〉以前に、創始された〉

と■とりあえず考えてみたい。

＊

■それでは、一体、誰が□七福神□という組み合わせを発案したのだろうか。

●それは、いうまでもなく分からない。

■しかし、実際に、

〈藤原氏の祖先である天児屋命を、寿老人と結びつけて習合させ、□七福神□のうちの一人とした〉

という経緯があったものならば、

〈□七福神を考え出し〉その信仰をおしすめて人々の間に浸透させる大きな働きをな

コクヨ ケ-20 20×20

H29(2017)11.19(日)(7回)
H31(2019)4.30(火)～4.30(3回)
H9.8.17(日)
H1.10.29(日)

かんき 歓喜 小林535P
仏の教えを理解して喜ぶ

令和2(2020)7.14(火)～7.17(4回)
めでた 目出度し えこ174P
神々しい えこ737P

ぐんしゅう 群衆 世人

5,807P

ひかえめ 控目 えこ1849P

かに 賢し えこ404P

7/17 下 7/15
7/15

米

したのは、――藤原氏一族の者であった
ということになろう。
◎とはいえ、神や天皇でない唯一の臣下なのだ
から、寿老人は賢くも常に控え目なのかも知れない。

米

だが
もっとも
律令制がすでに形式化し、また社会不安が大きく意識されるようになっていたこの当時、庶民にとっては「七福神」が
誰を投影していようとも、そのようなことはどうでもよいことだ。
「華やかで、目出度い七福神が、福をもたらしてくれる」
群衆は、ただただそれだけで歓喜し、福徳の神「七福神」を熱狂的に迎え入れたのであろう。
船に乗って漂い来る神々しい「七福神」の姿は、人々に大きな夢を与えたものであったと思われる。

438

コクヨ ケ-20 20×20

仏教の知識34　あらかじめ 予め 5818-2 5,808P

日本の下史③ 森ち 179P
広辞 976P
ネット仏の声語しらべ 289P

けんせい
権勢 広辞712P
権力と威勢と。

仏教の二元的世界

■平安貴族は、互いに権勢を競って栄華を求めるあまり、対立しているをのろったり、おとしいれたりする為、密教の加持祈禱を密教にたよるなどした。

■しかしそんなとき、内心は気がとがめ、おおいに恐れた。死んだ後、地獄へ落ちはせぬかとの不安に襲われるのだった。（「日本の歴史」(3)平安貴族、読売新聞社、一七九頁参照）

米

■では「先に進むまえに、仏教が説く「世界観・宇宙観」についての概略を述べておくことにしよう。

■仏教では、その世界像を、大きく二つの世界に分けて考える。

すなわち、

①「輪廻する世界」（後述）、及び、

仏教の知識 34

5,809P－1/2

孫悟空 元1323P
西遊記 (上)288P

西遊記中の瓢箪参照
ひょうたんの中にお金とか食べ物を詰め込める。

② 「輪廻しない世界」（西方浄土）

の二元的な構造とーてとらえている。

また、この二つの世界は、全く別々に存在しているので、つながっているとされる。

だから、あえていえば「――途方もなく巨大な瓢箪の形を思い浮かべると分かり易い。

とも呼ばれていて、

一、地獄（道）
二、餓鬼（道）
三、畜生（道）
四、修羅（道）
五、人間（道）
六、天（道）

の六道からなっている。

そーて、「輪廻する世界」とは、この

① 「輪廻する世界」は「六道輪廻の世界」

途中もなくあ5813P13行

コクヨ ケー20 20×20

六道のうちのどれかに生まれ変わり、死にかわりして、永遠に転生をつづけ、終りのないことを意味する。

• 人間は、再び人間に生まれ変わる場合もあるが①他の五道のいずれかに生まれ変わる場合もあり、——天や地獄等の生き物もまた、これら六道のいずれかに転生する。

• そのいずれに生まれ変わるかは、その生き物が生きている間に、どのような所業を為したかによって決定される。

• 悪事を為した者は地獄へ堕ちるし、善を為した者は天に生まれ変わることができる。

• 仏教では、この考え方を「因果応報」という。

• つまり、ということは、

一生懸命修行に励み、善行を積むことによって、

よりよい天に生まれ変われることができたとしても、私たちが「六道輪廻の世界」の住人であるかぎり、その寿命が尽きたのちには、

「因果応報」により、人間は地獄へ堕ちる可能性もあり得る。

仏教の知識34

わけだ。

●このことから分かるように「輪廻する世界」は、永遠に続く「迷いと煩悩の世界」なのである。

②一方、「輪廻しない世界」は「輪廻する世界」とは全く異なる正反対の世界だとされる。

●そこは、この世のいっさいの迷いや煩悩から解放された「さとりの世界」「仏陀の世界」であり「私たちが「極楽浄土」と呼ぶ理想の世界のことである。

そーて、「六道輪廻の世界」から脱出ーてもはや二度と輪廻することもない世界、「極楽浄土」に到達することを、「解脱」という。

つまり、仏教の二元的世界では、「輪廻する世界」から「輪廻ーない世界」へと「移動」することが可能なのである。

ただし、

もっとも、この二つの世界は、片道通行の関係にあって、前者から後者の方へのみ、一

仏教の知：35ページ右下

方通行的に移動できるものとされる。

そもそも、仏教の教えとは、つきるところ、この「輪廻の世界」からの「解脱」にある。

「どうすれば、さとりを開いて「仏陀」となり、――輪廻しない世界「極楽浄土」へ行けることができるか」

そのを、釈尊（釈迦）は、私たちに教えているのである。（「仏教の知識百科」主婦と生活社、三四ページ三五頁参照）

とはいえ、極楽浄土へ行ける人など、そんなに多いわけではなく、大多数の人は「輪廻する世界」に留まることを余儀なくされる。

恐らく、よほどの楽天家か自信家でもないかぎり、

「極楽浄土へ行ける」

とは確信が持てなかったであろう。

ことに、心の内をじっと見つめることが出

コクヨ ケ-20 20×20

5,811P－3/2

恐らく、前頁16行 恐らく
お怖に恐れる 左298P

（怖 懼 33）

来る人はなおのこと、心の奥底に見えがくれする己の邪心に胸を痛め「――来世を予感して怖じ懼れた」と思われる。

そうーた善良な人々は、その邪悪な心を必死になって理性で押え込み、両手を合わせ、

「せめて、地獄だけは堕ちませんように

と願ったのではなかろうか。

それでは、以下、「輪廻する世界」つまり「六道輪廻の世界」について「少し詳しくみてみることにしよう。

444

冥途の旅

■死後、先に述べた六つの世界（六道）のうちのどの世界に転生するかは、「因果応報」の基本原理によって決定される。すなわち、現代風にいえば、死後の裁判によって決定される。

■その裁判に必要な期間は、四十九日である。

●死者は、七日毎に一回づつ裁判官に従ってこの四十九日の間に七回、裁判を受ける。

■この期間（四十九日間）は、現世と来世の中間である。――そこで、この裁判を受ける世界のことを、「中陰の世界」と呼ぶ。

■そして、この間のことを、「冥途の旅」という。

（「仏教の知識百科」主婦と生活社、三九六頁参照）

コクヨ ケ-20 20×20

米

■死者は、この冥途の旅の間、どのような姿をしているのだろうか。

■死者はきわめて微細な体をしており、人間の目には見えないとされる。

■また、微細な死者は、香を食物としているといい、彼等のことを「食香」と呼ぶ。

そこで、仏前にお線香を絶やしてはならないということになる。（「仏教の知識百科」主婦と生活社、三[illegible]六頁参照）

■とすれば、その微細な体となった死者の目から見れば、

人間は、途轍もなく巨大な存在だ

ということになる。

おそらく

■まことも、このようなことを書くと奇異な感もあろうが、――以下、冥途の旅路を、人の体と対比させて述べてみることにしよう。

■昔の人達は、

「死んだ直後の四十九日間の冥途の旅」

について、誰[illegible]でも容易く理解できるように

極めて卑近な例として、人の体内を想像していたのであろう。

H6.6.11(土)(日)
H18.10.21(土)

母神の山 (東) 561P (南) 5858P

険しい 701P

5,814P

裁く 小林 875

玄 2156P 胸突山路や坂などの険しくなところ
死生の山 玄 996P
仏教の知識 36P

古今 304P

• つまり下

へこの巨人の姿形をーた大地の上を、死者が苦労しながら旅ーている様子〉を思い描いていたのであろうと推察される。

図 人は死ぬと、「死出の山」の麓に至る。

• 「古今集」巻十五恋歌、七八九に、

死出の山麓を見てぞ帰りにし（薄情な人）つらき人よりまづ越えじとて

とある。険しくて長い道程で「七日間で」「胸突八丁」の「死出の山」を越えなければならないのである。

• 「死出の山」とは、死後初七日の秦広王（来世の行き先を裁く最初の裁判官）の庁舎へ至る途の間にある「険阻な山のこと」である。

• 「死出の山」を「山また山が続くように見える」「巨人の胸」と対比させて考えてみたい。

• なおいつの頃からか、「八若狭湾（頭部）と京都盆地（腹部）との間の広大な山岳地・丹波高原が、「胸部」に見立てられ、ーそーて、「死出の山」にたとえられるようになったのであろう〉

と想到される。

• なお〈食べた物が〉食道を通って胃へ到達

する迄は早いが、死出の山を越えて
・これになぞらえて、第一の庁舎へ着くまでは
七日間という早さなのだろう。
胸の中央（みぞおち）あたりの秦広王の法廷
を出て、しばらく行くと、「三途の川」（奥
土の旅の途中にある川）にさしかかる。
・三途の川のほとりには「賽の河原」があっ
て、大勢の幼な子たちが、一生懸命、河原の
小石を積みあげ塔を作っている。
「三途の川」は、平坦な京都盆地を流れる
幾筋もの川にたとえられようか。
・かつて、京都盆地の南半部には、↑↑↑「巨
椋池」と称される大きな池があり、東西三
十二町（三・五キロ）、南北二十四町（二・六
キロ）、周囲四里十一町であった。
・徳川氏の時代、木津川の流れを南へ導いたことによって、池畔
新次良田になったという。（「帝国地名辞
典」太田為三郎、名著出版へ「巨椋池」参照）
・あるいは、この「巨椋池」周辺一帯の地を
「贈」（へそ）に見立てたのかも知れない。
（「贈」に見立てたのかも知れない。）
●尚、「贈」という字は、呉音で「サイ」と訓む。
（「大字典」講談社へ「贈」参照）

コクヨ　ケ-20　20×20

タイトル 国5545' あなのあなめ
国5546'
国5611' 5864' P5612'
国5948'
まざわ 広 2069' まにのそうとある時
5,816'
一途の川の渡(賽) 小林931'
う文化 仏教の知識261'

◎また、巨椋池のやや北方、賀茂川と桂川とが合流するあたりの河原のことを、昔、「左比の河原」と呼んでいたといい、――賽の河原とは、この左比の河原（西院の河原）のことだろうと解されている。（第九十五章八あなあなめの項において既述）

◎巨椋池（膵）の北岸部に当る賽の河原（左比の河原）は、膵（へそ）の河原とも呼ばれていたのであろう。

◎つまり、左比の河原は、巨人の膵のすぐ近くに位置する所とみなされていたように想察される。

◎賽には、神仏のごりやくのお礼に祭るという意味がある。（漢和辞典 小林信明）

◎死者は、賽の河原において遥か南方を拝し、そして三途の川の渡し賃をささげたのち――三途の川の川幅が最も広いと考えられたのではなかろうか。

◎三途の川を渡ると、岸辺には懸衣翁がいて、冥土の旅人から衣服をはぎとり、爺婆がいて、冥土の旅人から衣服をはぎとり巨椋池（膵）部を渡って行くことになる。

コクヨ ケ-20 20×20

「岸辺の木」にかけるとされる。

つまり、

(1)「三途の川」は、大男の腹部の太い皮に、

(2)「巨椋池」は、臍（胃）に、

(3)「賽の河原」（左比の河原）は、臍の北岸の遥拝所に、

(4)「岸辺の木」は、臍あたりの毛に、

たとえてみることが出来よう。

その後、残りの裁判が次から次へと七日毎に行なわれる。

裁判の日程は、次の通りである。

七日（初七日）――秦広王

十四日（二七日）――初江王

二一日（三七日）――宋帝王

二八日（四七日）――五官王（秤を用いて裁く）

三五日（五七日）――閻魔王（鏡を用いて裁く）

四二日（六七日）――変成王

四九日（七七日）――泰山王（最終判決）

つまり、三十五日目にかの有名な閻魔王の裁きがあり、そして四十九日目に泰山王の最終判決がある。（写真図版827「閻魔王坐像」参照）

（米）

・カラー
・右頁の右上（七頁）に、はみ出して大きく載せて下さい。

451

5,817P-1/2

451

142字 写真図版827 閻魔王坐像

132字 『仏像の見方 見分け方』河原由雄監修、主婦と生活社、平成7年7月刊行の改訂版、96頁 参照。

120字 ・奈良県白毫寺、木造、像高119.0cm、鎌倉時代、重文。
・閻魔王の迫力がすさまじい。運慶の孫康円の作。

厳しい 元96ᵖ　処処 元1121ᵖ

5,818ᵖ−1/2

■とすれば、これら七つの庁舎は、近畿地方のどこにあると考えられていたのだろうか。

・それは、□うまでもなく定かでないこと□ある。

・しかしながら、□かたち、往古の人々は、□曲りくねった陽の上をなぞる□かのように、死者達の道がうねうねと続いていてその道の処々に、厳しい庁舎が聳え立っている□と考えていたのかも知れない。

コクヨ　ケ−20　20×20　②

増3行

三省堂 435
高科⑲-81

高等地図図23

元 1335

5,818円/2

ちくいち 元 逐一 1424

5825

天文分野

金屋に指石地蔵 紀ヨダ 28

2852 15行

平め 3808 16行

五月雨 ?

そうにゃ 三着え

●曲り曲って続く一本道。――――――その道を、三者達は、連らなりながら進んでいった。

トル

ことであろうか。

■そーて、予め述べると、

●三十五日目の闇魔王の庁は、『長谷寺の地に

●四十九日目の泰山王の庁は、『三輪山』に

●六道の分岐点は、泰山王の庁舎前『すなわち三輪山の麓の椿市地蔵のある『衢』に

目には見えないが、霊の世界に存在しているものであろう、と推察される。

何故『

そう考えるのか。それをここで、簡潔に

潔にまとめて、分り易く書き記すのは非常に困難である。追々、述べてゆくことにしたい。

＊

トル

■先ず突然ながら中国山東半島の山々から少し離れた内陸部の山塊にひときわ高く聳える『泰山』(一五四五㍍)を居処としている『泰山府君』

について、見てみることにしよう。

■『世界大百科事典』平凡社(泰山府君)の項には『泰山府君』について、こう記されている。

関

長谷寺のすぐ西側に聳える

述べる

5万分の1地図で確認した。

453

「中国の泰山に住むと信じられている神々を、泰山府君と呼んでいる。

府君とは、役所の長官の意である。そして泰山府君という場合の「府」は、冥府、すなわち死人を取り扱う役所のことである。

泰山は、古くから名山として知られていたが、秦の始皇帝や漢の武帝がこの山に登って封禅の祭をおこなってから、ますますいよいよ神秘性を高めた。しかし、泰山がいつごろから冥府として信じられるようになったかは明らかでない。

もっとも、後漢時代に入ると、この種の信仰が成立していたことを示す文献があらわれる。「孝経緯援神契」に、「泰山は一に天孫という。天帝の孫たるをいえるなり。人の魂を召すことをつかさどる。東方は万物の初めて成るところなり。ゆえに人の生命の長短を知る」とある。また「風俗通」は、「泰山に金の箱があって、この中に天下の人の寿命を記入した札が蔵されている」という伝説をあげ

「ところで」㊀5800字 ㊁5829字　事実鳴等 約上122字 所 ㊁5827字-3/3段 5,820字　また 前段18行

そして 捜神記 1290字 同書 ⑲-81字 ㊁は4でない！

改行

る。このほか、漢代の古詩や『後漢書』『魏志』などにも、泰山が死者の集まる冥府であることを述べた語句がみえる。

ただ、泰山府君という神の名を記したものとしては、晋の干宝の『捜神記』が最も古い。

その後、道教の神として重要な地位があたえられ、一名『東岳神』と呼ばれ、各地に東岳廟が建てられるようになった。日本には、平安朝より、その信仰が伝えられた」

改行

という。

そして……何と

さらに『広弘明集』にこう述べられている。

「泰山府君は、閻魔王の書記として、人の善悪を記述する。また、人の寿命・福禄をつかさどる泰山の山神とされ、古来道家で祀られており、仏教と習合して本地は『地蔵菩薩』とされる。日本では、『素戔嗚尊』に付会されることがある」

という。（「広弘明集」「泰山府君」参照）

『昔、日本の船乗り達は、あの島は、

ヘインドシナ半島を「頭」、江南地方を「太

鼓腹し、山東半島を「陽物」〉に見立てたとでもあれ、
〈陽物状に見える山東半島の山々から少し離れた内陸部の山塊に高峰「泰山」があって〉泰山府君が祀られてげる〉
といえよう。
〈なるほどいささか奇妙ではあるが、この物語では、
〈泰山王の方は、大男の陽物の基部のやや奥まった所、――陽物を屹立させるのに最も重要な働きをなす所にある、と考えられたのであろう〉
と想定してみたい。
〈それでは、陽物の形をした山東半島の基部の奥にある「泰山府君」の方は――――
近畿地方の地形にあてはめてみると、何処に相当するといえようか。

「とすれば」次頁!

5821「きつりつ 屹立 540」
けしん 化身 688 小林159 まれかみの化身
太 1335「大口主命 うちでの小槌をもった陽物を平すか?」 国58-33 太鼓腹 元1332

H9、8、21(木)
H6、6、16(木)

「大神神社」87ページには 紀上128 紀上151 ㊥5819ページ3行

5,822ページ

木津・天理・桜井・笠置・名張

和泉山脈 高等地図 図13

●陽物を思わせる「山東半島」に対比される。

●とすれば、「山東半島」の山々から少し離れた内陸部の山塊にある高峯「泰山」に対比される所は、――桜井・名張・笠置・木津。

奈良・天理によって囲まれる山塊中の秀麗な高峯「三輪山」である。「といえようになるであろう。

ここに、

①泰山の泰山府君は、㋐冥府㋑の長官（閻魔王の書記）である。

②三輪山の祭神は、大物主神（＝大国主命）

であり、大国主命は㋐幽事㋑を治める神である。（神代紀(上)第八段一書第六。第九段一書第二参照）

とされていて、大いに注目される。

●泰山府君も、大国主命（＝大物主神）も、冥界で幽事を治めるという共通点があり、――

――こうしたことからいっても、ごく自然

コクヨ ケ-20 20×20

に、無理なく両者が結びつけられたり考えられるようになったのかも知れない。

● そこでいったい（日本仏教では）、一体何と、

（中国においては――）「泰山府君」の本地は「地蔵菩薩」であると考えられた）

ということについて、その経緯など詳しくは分からないが、

まっとも、何と

■ なお、

「泰山府君」は「閻魔王の書記」である

というのだから、――三輪山と、長谷寺との間には、密接な関係があったのだろうと思われる。（要検討）

相互

（閻魔王の庁舎）

＊

5,824P　紀上147P　方③-279P, 307P　紀下8P, 190P, 540P　桜井金屋 ☎2852 1行神　やまゆ云 223P　山際 山のまわり山に近いあたり

大和国の三輪山の麓（西南の山際）には古来、「海石榴市の術」と称される交差点があったようである。（「武烈即位前紀」「推古紀十六年八月三日条」参照）

万葉集には、「海石榴市の八十の衢」と歌われている。（万巻一二九五一。同一二一三一〇一参照）

あるいは、三輪山の麓の「海石榴市の術」は、八叉路（八達之衢）になっていたのかも知れない。（神代紀下第九段一書第一へ天ノ

（死者達は、丹波高原から「賚の河原」を通って南下し、閻魔王の庁（長谷寺の地）を訪れ、ここから西行して、三輪山の麓の「海石榴市の術」へ至る）

と考えられたように推察される（一本目の道）

三輪山には、泰山王の庁があって、最後の審判を受ける為に庁舎へと向う者！！！！！お

よび庁舎から「海石榴市の術」へ戻ってくる者の長蛇の列があったろうが（二本目の道）

459

☎5836 4行

三輪山の泰山王の庁から℃海石榴市の街に引き返してきた者達は、――奈良盆地の方へ向かって伸びる六道を目にしたのである。

この六道の各々には、鳥居があって、どうしても六つの鳥居のうちの一つを選ばなければならないのだという。

「どの鳥居をくぐろうか。こちらの鳥居にしようか。いや、あっちの鳥居の方がいいようにも見えるL

死者達は、迷いに迷う。

そんな時、死者達は、八達衢に静かに立っておいでになるお地蔵様に気が付き、

「どうかお助け下さい」

と伏しおがんだのだろうことであろう。

なお、随分奇妙なことながら、日本では、

「閻魔王（閻羅王ともいう）は、実は、地蔵菩薩と一体である」

とされる。（写真図版820「閻魔地蔵」参照）

例えば、℃日本霊異記℃下。九、

「我を知らむと欲はば、我は閻羅王、汝が

・カラー
・頁の上(天頁)に、はみ出して大きく掲載下さい。

5,825-P-2/8

194

14QG
口頁図版828 閻魔地蔵(えんまじぞう)〈住吉大社の北約400メートル。高さ約1.2メートル〉
12QG
・ふだんは顔だけだが、地蔵盆の8月23、24日両日は像全体を開帳(かいちょう)。
・目をつり上げ、牙(きば)を見せるこの石仏(せきぶつ)は、1538年(天文7年)に作られた。
13QG
『朝日新聞』。平成25年4月7日、同5月11日付〈閻魔地蔵〉参照。

H29(2017)11.23～26(8回) あ5817P-1/2 35日目
H30(2018)11.30(金)～

詳しくは今からないが 5,826P-1/2

閻魔王地蔵王入門 138P えんまと地蔵との二面性をすついよのでようう

「ぢざう」です

T 12/1

國に地蔵菩薩と稱ふ。是れなりし
とある。（「日本靈異記」日本古典文学大系①
岩波書店、三四三頁、注三参照）
とはいえ、
へいたけだかに人を審判する閻魔大王ㇺ
が、ーーーーー実は、「地蔵菩薩」なのだ〉
というミとになると、メチャクチャに混乱し
てしまいそうでもある。（「地蔵さま入門」大
法輪閣、一三七～八頁参照）
昔の人は、どうしてこんな風な考え方をす
るようになったのであろうか。
詳しくは今からないが、その物語では
そのいきさつは分らないが、この物語では
仮りに、
閻魔大王は三面性があって時には三十
五日目の判決者、ーーーそして時には慈悲
深くも地獄へ落ちようとする者を救って下さ
る地蔵菩薩に変身さみる〉
と考えられていたのであろう、とーて話を進
めてゆくことにしたい。

＊

462

コクヨ ケ-20 20×20